



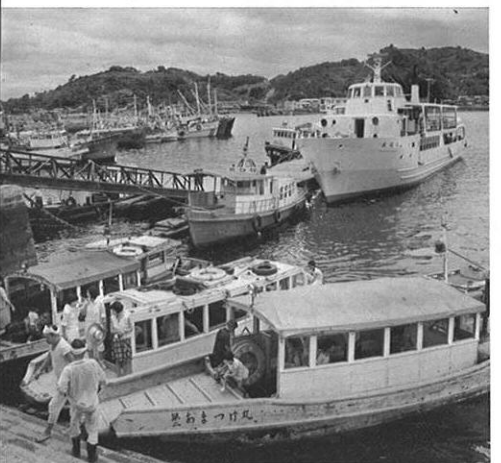
★羊角湾に影を落す十字の碑……
殉教の哀史を秘める崎津



★フランスのガルニエ神父が建てた大江の天主堂



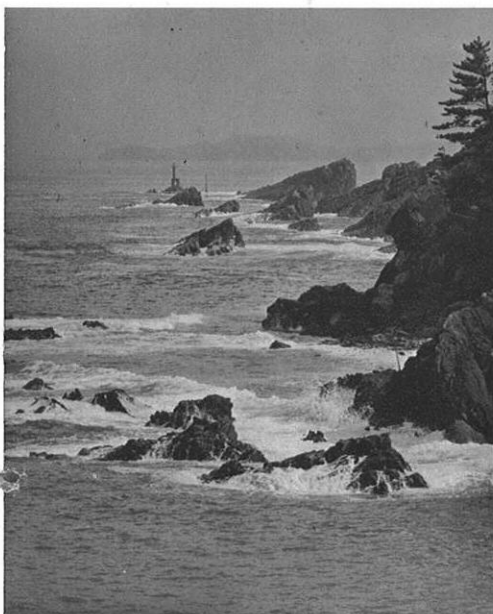
★海をのぞむ植物園
が五橋の周辺に……



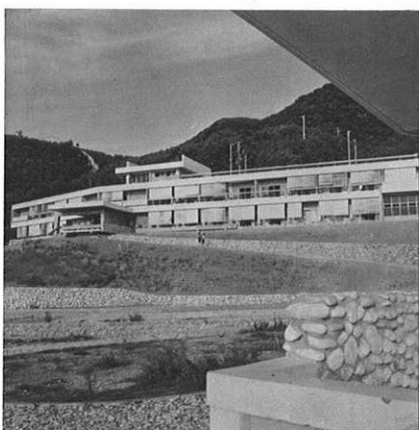
★牛深港は今日も生産の活気にみ
ちている。

カメラと素描・あまくさの風光

★切支丹館(上)や殉教千人塚などがある本渡市の公園



★東支那海の怒濤が打ちよせる西海岸



★天草灘を見下ろす国民宿舎「あまくさ荘」

島に生きる

★本渡市小松原
後藤ひのさん

明治二十八年生まれだから七一才とい
うわけだが、それがなかなかカクシヤク
として、話し振りも明快そのものであ
る。やゝ鋭いまなざしが、風雪を耐えぬ
いてきたひとりの女のきびしい人生をの
ぞかせる。ひのさんは薩摩生まれだが、
家庭の事情で一六才の時単身で実姉の嫁
ぎ先であった本渡町へ移ってきた。生来
から実行派タイプのひのさんは、人に頼
ることを嫌い、自分の道は自分で拓く強
い意志を秘めていた。小学四年の時に習
った灯を持つナイチンゲールの姿や、和

溢れた歳月であった。第一期卒業生は一
三名だった。卒業すると間もなく熊本市
の福田産婦人科病院に勤務することにな
り、その頃大矢崎にあった本渡港で、海
の中を人力車で乗船した。院長の福田令
寿先生は非常に厳しかったが反面いたわ
りもあった。その後、福岡の直方炭坑病
院に転勤。だが大正十二年の関東大震災
―その時ひのさんは兄の手引きで東京の
病院で働いていたが、街は灰燼と化し止
むなく振り出しの天草に帰った。ひのさ
んはそれを一つの転機として、助産婦開
業に踏切った。

「ハイカラさん」のお通り

東京三越製のランシャの帽子と、紺の洋
服は三〇才のひのさんによく似合った。
その上、まだ天草では珍しかった自転
車でさっそうと風を切る姿は町の人びと
の目を奪った。『取上げ婆さん』という
イメージとは大変な違いでもあった。そ
の頃、春がくると本渡の町では蕪市がひ
らかれ、近郷の若い衆が大きな蕪かごを
天秤でかついで町に出てきていた。その
群の中を「ハイカラ産婆さん」が自転車
で縫うように走るので、それをふり返る
毎に「小さな波乱」を起したりした。ひ
のさんはただひたすらに仕事に打ち込ん
だ。天草はいずれも貧しく出産費用もロ
クに払えない家が多かった。ひのさんは
どこを向いても子沢山という現実、島
の生活の宿命のようなものを感じたりし

カンナの花咲く庭先で……右端が後藤さん



た。大正十五年に初めて県の助産婦会が
発足した。

母子保健にかけた五十年

戦後の相次ぐ復興と引揚げで、日本は
かなりのベビーブームを生じ、GHQは
昭和二十二年に家族計画の実施を要請し
た。県では受胎調節指導の講習会を開い
て指導員の養成に努めた。ひのさんは第
一回目の受講者として天草からただ一人
出席した。ひのさんは、本渡市を中心と
して、天草郡の助産婦を集めて根気よく
伝達講習を行なった。又、保健所や市や
町の保健婦ともタイアップして母親学級
や婦人会の研究会で家族計画を説き、実

地指導に生来の情熱とネバリをぶちまけ
た。助産婦業と受胎調節は本来結びつき
そうにないものだが、優生保護と母子保
健という抜本的な考え方がひのさんの活
動力を支えた。それはかつて若いひのさ
んが貧しい田舎廻りをしていた頃に感じ
取った本質的な問題でもあったのだ。昭
和二十二年から十年近く天草郡助産婦会
長をつとめ抜いたひのさんは今はもう現
役ではない。だがひのさんの部屋は、い
つでも仕事ができるように設備が整って
いる。今でも島の各地から指導を受けに
くる人が時折あるが、そんな時ひのさん
のまなざしは別人のように若く輝くので
ある。

ここに人あり

看護婦養成の過程と同時に、
助産婦の科目も克服した。ひの
さんにとっては最も希望に満ち